

平成 21 年 12 月

もの音の一つずつ減る夜長かな
百千鳥百の千鳥の意にあらず
夜光虫はなやぐ三百六十度の真闇
止まぬと見せて夕立すぐあがる
優柔不断着地ためらふ風花は
よく効きさうな寒肥のにほひかな
寄鍋の湯気に言葉を濁さるる
夜の枯木 LED を身にまとひ
予報士は春泥までは言わなんだ
来世は目刺などには生まるるな
立体型マスクを買ひに冬支度
緑陰の木の椅子こはれかけてゐる
林檎剥くひとふでがきの皮たらし
檸檬てふ文字に果汁のぎつしり感
若い時分はかなりのワルで生身魂
若さとはとんがることよ木の芽風
わが膝にもどれば親し冬の蠅
藁屋根の裾を引つ張り軒氷柱